

素 顔 拝 見



特殊歯科総合治療部

講師 鈴木 政 弘

平成11年4月より、特殊歯科総合治療部の顎関節症治療部門を担当させて頂いてます。昭和61年に本学歯学部を卒業した16期生です。

先日、北魚沼郡小出町から小学5年生の患者さんが紹介されたのですが、北魚沼は卒後直ぐ2年間ほど勤務医を経験した場所であり、自分の歯科臨床の出発点です。懐かしくて、患者さんのお母さんにそのことをお話したところ、私の勤務していた診療所に当時通院されていたとのご返事にびっくりしました。それと同時に、その当時は生まれていなかったお子さんが、もう小学5年生に成長されていて、卒後14年という月日の早さに今更ながら驚かされました。

生まれは新潟市で新潟育ち、今年の1月で38歳になりました。よく新潟の人は、「地味で粘り強い」「シャイで謙虚」という特性を持っていると言われ、それが新潟人の長所であり短所でもあるようです。粘り強さに関しては？ですが、私も一応その他の特性は備えており新潟人の端くれであると自覚しています。また、新潟人は必ず「美味しい米・酒・魚」を自慢するようですが、北魚沼出身の俳優、渡辺謙さんは母校の記念誌に寄稿した文章の中で、「艶のある、粘り気のあるコシヒカリのような俳優になりたいものです」と述べられています。この言葉の奥には、炊き立てだけではなく、冷めても艶があり美味しいコシヒカリのように、若いときだけではなく、年を取っても魅力を持つ、なくてはならない俳優になりたいという意味を込めたようで、「うまいこと言うなあー」と感心しました。近年、新潟の農業界では、コシヒカリを更

に品質改良するスーパーコシヒカリなる取り組みが行われているそうですが、新潟の米がますます旨くなることを期待するとともに、自分も謙さんをまねて、年をとっても懐の深い、患者さんから必要とされる歯科医になりたいという思いを込めて、「スーパーコシヒカリのような歯科医になりたい」を目標に精進したいと思っております。

ところで、卒後3年間外で勤務した後、補綴学第1講座に入局をお願いして大学に戻って参りました。勤務医時代、何とか無難に臨床をこなすことはできても、自分には芯となるものがないように思えてきた結果としての決断でした。大学では、早くから顎関節症に関する臨床・研究に道付けしてもらおうという幸運に恵まれ、やりがいのある仕事をさせてもらっていると感謝しております。当初は、顎機能障害に対する咬合の面からのアプローチが主体でしたが、近年は、顎関節症と顔面部の他の疼痛疾患との鑑別の必要、顎関節症の整形外科的疾患としての特性、心身症としての一面、生活習慣病としての一面、等広い領域の知識、技術が必要であるという認識のもと研鑽分野を広げるよう努めており、昨年3月まで約2年間は米国で口腔顔面痛の臨床を研修して参りました。

このような経過を経て、自分の幹の部分の太くするべく、今日までやってきたつもりですが、これまでの節目、節目には必ず誰かにお世話になったり、ご助言をいただいたり、恩師と言える方々との出会いがありました。こうした、人との縁というものを大切にこれからも精進したいと思っております。今後は幹を太くすると共に、枝葉の部分を増やしバランスの良い樹になれば、と願っています。

✧



歯科補綴学第二講座

講師 田 口 直 幸

この歯学部ニュースに原稿を執筆させていただくのは、入学時に『入学して想うこと』を執筆して以来ですので、もうかれこれ16年ぶりになります。その中でも書いたのですが、私が歯医者になると思ったのは小学生の時でした。小さい頃から虫歯が多かったことと、近くに歩いたり自転車でいける歯科医院がなかったこともあり、いろいろな歯医者に通っては「この先生はとても怖い」とか「あその先生はとても優しいけど、受付のおばさんが意地悪だ」などと、子供なりに評価していた記憶があります。昔から細かい作業が好きだったこともあり、「よーし、大きくなったら優しい歯医者になって、患者さんから喜んでもらおう！」と誓ったのでした。結局のところ、体は大きくなることができませんでしたが、こうして歯医者にはなることができました。

私の出身は、埼玉県の秩父（ちちぶ）という盆地です。秩父セメントとか夜祭りとかで有名なのですが、関東の人にとっては手軽に行ける田舎という感じです。出身高校は熊谷高校ですが、電車通学に1時間以上もかかり、朝練習（高校時代はバドミントン部でした）をやっていたときは朝6時に家を出ていました。高校3年の時に、野球部が甲子園に運良く出場することができ、甲子園球場にも応援に行きました。そのお陰で秋の文化祭はたくさんの人が集まり、伝統の秩父支部劇という卑わいな寸劇（主役は毎年必ず〇頭マン）も大盛況でした。ミス熊高を決めるコンテストに女装して出たのも、今となってはいい思い出です。

東京で1年間の浪人生活の後、新潟大学に合格して希望に満ちあふれている時に歯学部ニュースの原稿を依頼されたため、今読み返す（自宅に保管してあります）と恥ずかしいようなことをたくさん書いていました。決して文章に書いたような立派な学生にはなることができず、サッカーばか

りしていた6年間でした。

大学を卒業後、大学院として第2補綴科に入りましたが、卒業当時と今では全く歯科事情が変わってきたと思います。新しい歯科材料や治療方法が多く開発されてきている点もありますが、歯科医師の過剰により競争も激しくなりました。昔のようにのんびりという雰囲気ではなく、何かやらなければならないという緊迫感の毎日です。でも考えてみれば、今のような状態がむしろ普通で、昔の古き良き時代というのがおかしかったのかも知れません。

新潟大学の先生方は、臨床・研究・教育に対して大変熱心であり、特に助講会の先生方の熱意には感動すら覚えます。若輩ながら、こうした助講会の先生方に仲間入りさせていただいたことは、大変光栄に思っております。

何卒よろしく願いいたします。

*

「思いつくままに…」



歯科補綴学第二講座

講師 伊 東 直 子

歯学部ニュースで各先生方の素顔拝見を拝読させていただいておりましたが、まさか私の所へ原稿依頼がくるとは夢にも思いませんでした。せっかくの機会ですから大学へ入学する前のことから現在考えていることまで思いつくままに書いてみたいと思います。

私は父の仕事の関係で両親が当時の直江津市にいたころ生まれ（わたしの名前の由来はここにあります。）、その後、長岡を経て新潟市へ引っ越してきたのは4歳頃でした。県外でくらしただけではなく、大学時代は一人暮らしに憧れたこともありますが、食事・お風呂が用意されている暮らしもなかなかいいものでした。

大学生のときは半分冗談ですが「歌って踊れる

歯医者」を目指し、運動会では応援合戦の振り付け師となり、歯学祭ではステージで歌っていたことが思い出されますが、お酒を飲まずにこういことができるのが私の特技でもありました。総診の頃は金曜日になると飲み会に出かけ、体格がよく、顔色ひとつかえずお酒を飲む私は「男」扱いされ、鍛えられていったものでした。大学4年生までほとんど飲めなかった私が酒豪へ変身をとげたのはこの頃でした。しかし、年には勝てず、最近ではお酒の量もめっきり減ってしまったのは寂しい限りです。

さて、新潟大学を卒業した後大学院生となって、草刈教授がよくおっしゃっている「臨床」「教育」「研究」の3本柱の「研究」をかじり出したわけですが、1年目の頃は「歌って踊れる歯医者」のための特訓が功を奏し、医局の様々な行事のときには少しは役立ったようです。それはそうと、時々どうして大学院生になったのだろうかと考えることがあります。大学生の頃どちらかというと器用ではなく、基礎実習ではいつも居残り組だった私はひとつのことをじっくり研究していく方があっていと思い込んでいましたが、進路を決める際にかかなり悩み、ライターの先生方に相談したりもしました。結局は第2補綴科の教授室へご挨拶へ伺ったとき、草刈教授が「この中で大学院生希望は誰なんだ。」とおっしゃった太く威厳の有る声に圧倒されていたのでしょう、思わず手を挙げてしまったのが真相(?)かもしれません。実際研究をやってみるとすべてがうまくいかず、やや神経質のわたしは学会発表の度に眠れない程緊張し、食事がのどを通らないことも頻繁に有りましたが、医局のみなさんの協力のおかげで無事に修了することができ、今では貴重ですばらしい思い出のひとつとなっています。

今現在は、昨年医局長と講師をいっぺんに仰せ

つかり、草刈教授の3本柱に少しでも近づけるよう、また、歴代の医局長に負けないよう努力しているところです。私は第2補綴科創設以来初めての女性医局長で、私より他の医局員の方が戸惑っているかもしれませんが、それでも何とかやっこれているのは周囲の人たちの協力があつてこそと感謝している次第です。最近大学で仕事をしながら考えることといたら、書類の山をどうしたらスムーズに片づけられるか、医局をまとめる秘訣は何かなどの事務的なことから、全身のバランスを良くする咬合とはどんなものか、レーザーを補綴に取り入れるにはどうしたらいいかといった臨床的な事まで多種に渡り、自分の能力のキャパシティを遙かに越え、まとまりがつかない状態になっております。それでは、このようにして溜まっていくストレスをどう発散しているかという、突然「旅に出る」といって旅行に行ったり、高校の頃からやっていたバスケットを最近では体力がないので観戦に行く、もしくはテレビで見てライブかのように騒ぐ…といった方法が主です。それからたぶんストレスのせいでプラキシズムをかなり昔からやっているようで今では犬歯がえぐれているような状態なのですが、さらに「ろくろっ首」といわれたことがあり（首が長いということではなく頭部から腰部までくねくね曲がっていて身体のバランスが悪い）、だから、咬合と全身状態が気になるもしくは興味が持てるのだと思います。補綴科へいらっしゃる患者さんの中には同じような問題を抱えている人が少なくないので、今後も考えていきたいと思います。

以上、少々まとまりのない文章になってしまいましたが、自分の能力が許す限り多くのことに挑戦していきたいと考えながら終わりにしたいと思います。